

『本当は猫が好きより』

癒しの心理学

『本当は猫が好き』を読んで

穂高 忍

世の中の人には「たかが猫が一。」と言うかも知れませんが、猫によって人生に潤いが生じたり、生き甲斐が出来たり、失意から救われたり、良い芸術作品が創り出せたり、輝きが蘇ったりと数多くあると思っています。

前号で寺田薫女史が書かれた『本当は猫が好き』（心を癒す心理学）を読んで心が動かされました。先生に「このページ（企画）を継続するといいいですね。私も書きたいです。」とお話しました。

丁度時を同じくして今年の12月に新潮社より発行されました『猫だましい』（河合隼雄著）を早速買って読み始めました。京大名誉教授、心理療法家の大先生の著ですからカミュのシジフォスの神話にも似た、易しいようで、むずかしく哲学的で考え深いものを感じました。

なぜ猫なのかは少々難解の感がありましたが読破出来ました。いよいよ癒しのドラマ、猫を主題とする作品が『牡猫ムル』から始まり、子供の頃に読んだおなじみの『長靴をはいた猫』、昔から怪談として知られている『鍋島の化け猫』、全国学校図書館協議会選定図書の『100万回生きた猫』などなど多くの猫物語の粗筋を紹介しそれぞれに登場する猫と人間とのからみ合いの中から焦点になっている猫の持つ意味を心理学者の視点で解明して論じておられます。

『茂吉の猫』

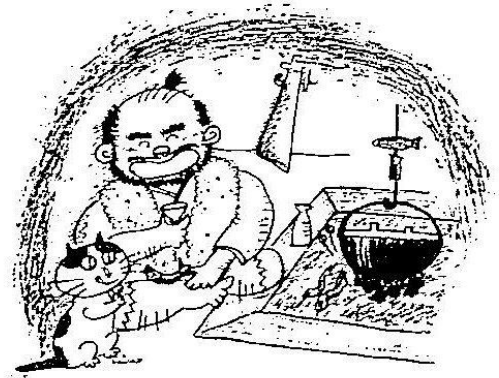
私が好きな秋田の民話の中にあります猫物語から私なりの癒しの心理学を書いてみます。

それは『茂吉の猫』というお話です。20数年前に出会った児童のための図書ですが、くり返し味読しているうちに、一人暮らしの鉄砲うちの山男と小さな三毛猫の相互の心情にいたく感じ入ったものです。

その粗筋ですが、茂吉の鉄砲うちの腕前はたいしたものでしたが、とほうもない酒好きで嫁様のきてがなかったのです。そこでかわいらしい三毛猫をもらって来てそばに据えて猫を話し相手に酒を飲み気楽な暮らしをしていま

した。ところが、小さな三毛猫が夜になると化け物の手先になって使われ、茂吉の名を騙り、童子に身を変えた猫は酒屋から酒を付けて買い化け物の仲間のところへ運んでいました。或る夜、酒屋の主人と茂吉に見つけられてしまいます。童子に化けた猫を追いかけますが、化け物づくしの野原に迷い込んでしまいます。そこで化け物達に囲まれて「茂吉を殺すべし」と強く命令されている猫を見ます。茂吉の猫は「おら、やんだ、おら茂吉が好きだもの。」と本心を語り化け物と対決することになってしまいます。その時茂吉の鉄砲が火をふき三毛猫を救うのです。暗闇の中にニャオン、ニャオンと鳴き茂吉にすり寄って「ごめんなさい。」をする茂吉の猫。

「こら、お前みたちびっ子猫が、一人前に化け物の仲間入りすんでね。このばかたれ。」と茂吉は猫を叱りとばして肩に乗せ家に帰りました。という実に易しい物語なのです。



野山に出れば勇猛果敢な猟師の茂吉も、膳の端に猫を据えて猟のことを語りながら、肴を分かち飲む酒は、さぞ美味だったでしょう。三毛猫もご主人様の膝に手をかけ肴をもらって満足顔だったでしょう。叱りながらも猫を肩に乗せて家路につく茂吉の気持ち、肩に乗せられた猫の気持ち、これらはまさに相互的で癒しの心理学だと私は思うのです。古い民話の中にも今日言われています癒しの世界を見ることが出来ました。